

# ふれあい

杉山民謡会 会報



NO.36



二代目襲名

10周年

あけましておめでとうございませす



「新型コロナウイルス感染者今日は何人」と耳にするたび、初期の頃は、コロナ情報に敏感になり恐さを感じながら過ごしていましたが、月日の経過と共に感染予防の仕方や医療関係の知識等が定着して「正しく恐れる」意識に変わりました。

外出を控え、三密を避け、手洗い、うがい、消毒、マスクの着用を徹底しています。

年頭の挨拶がこのようになってしまいましたが、感染には気をつけましょう。

さて、杉山会の昨年の行事予定には発表会が、ありま  
した。新型コロナウイルス感染拡大防止の為、やむなく  
中止の選択をしました。コロナ禍により、ほぼ民謡活動  
が出来ない状況ですが、これをチャンスの時期と捉え、  
お稽古してきた曲を更に自主練習で磨きをかけ完成させ  
ましょう。

いろいろ想像しながら次期おさらい会や発表会が無事に  
開催される事を願っています。

この先の状況が見えず不安ですが、行事を実現するた  
めに「今、何が出来るか」「どうしたら出来るか」を基  
本にこの一年を、皆さんと一緒に乗り越えていきたいと  
思います。

本年も、どうぞよろしくお願い申し上げます。

# 今年は・・・

皆さまにはどのような年であったか

中国武漢で発生した新型コロナウイルス。私を含めて多くの人が、しばらくすれば治まるのではと・・・

何か遠いところで起っているかのような安心感・・・

それが、あつという間に隣国日本はもちろん全世界にまで波及拡大していったコロナウイルス感染症。有名人の死亡や感染がニュース。

我が石川県でも介護福祉施設、医療機関などで集団感染(クラスター)が発生し、見えない敵ウイルスに恐怖を覚え、自分の周りにも感染者が居ると噂に聞くと不安にもなる。

外出の自粛、感染拡大地域への往来禁止や日常の生活を営む上での約束ごとが国や県から発出されるなど、制限を余儀なくされるに至った人とはソーシャルディスタンスを取り、集まりは三つの密(密閉・密集・密接)を避けるなどこれまで無い制限を守ること、手指の消毒、マスク着用が有効であると。何処に行くにもこれを守る生活が当たり前となつている。

私達民謡を愛好する者にとつても、集まり唄うことがもろに制限の対象となり、教室、今年予定の発表会・二代目リサイタル、各コンクール、学校や介護施設への訪問、役員会などなどが自粛という制約から中止となった。

仲間と会えない、唄の練習が出来ないとストレスもたまるが、これは全てが自分を守り、家族を守り、仲間を守るという「絶対移らない・大切な人に移さない」ことに繋がっている。これも致し方のないことである。

一旦は、下火になつたようにも思えたが、この原稿を書いている(令和二年十二月一日)今も、第三波の到来だという。第二波の春のように多くの活動自粛も余儀なくなるのではと心配でもある。

自粛したこの一年間を人生の充電期間と前向きに捉え、是非来年はウイルスの影響が排除されたスツキリとした一年になり、思う存分に民謡を楽しみたいものである。

終わりになるが、当会にとって大変悲しい出来事である。  
サブちゃん、突然に交通事故で逝つた・・・

コロナの騒ぎが大きくなりつつあった頃の二月、一緒に行つた「なばなの里」の研修旅行が最後だったか：広大な敷地に作られた季節を彩る花々、壮大なイルミネーションの輝くトンネルを歩いていた姿は今でも私の臉に残像として焼き付いている。

また、日民大会でも常に入賞していた荒木さんも・・・  
人生寿命と言つてしまえばそれまでだが、とても悲しく残念である。  
あらためてご冥福をお祈りする。

(合掌)

会長 杉山哲明



## 私のこの一年

やすらぎ支部長 前川昭治

一月八日。例年のごとく正月早々、ボランティアで高齢者施設へ。

二月中まで計六回訪問を実施。私らの訪問は、我々が高齢で年が近いのか、気持ちに通じて楽しいものです。

これは見る者の目線に立った司会（西村さん）の、たまものと思っっています

二月十六日。久しぶりのバス旅行：植物園を思わせる なばなの里？

行ってみて改めて名前通りの（笑）

昔、子供が小さいころに行ったナガシマランドの近くだった。

中村三朗さんも元気に参加されて、彼のスナップも何枚か撮ってありました改めて、中村さんの遺徳を偲び、追悼の意を表したいと思えます。

八月に入ってから、横浜の弟が前立腺ガンの転移が進み亡くなった。

四〇五年前からガン症状の数値を目安に治療していたのですが、今年から下半身が動かず自宅療養していた。コロナウイルス感染の折、葬儀には行かず交通費を香典に上乗せして送った・

五十五年前の古い思い出。当時、弟は学生で六畳一間の下宿生活。その部屋で、ラジオで聞いた都会の喧騒が、しばらく耳に残っていた。東京オリンピック開催年で、国立競技場の百メートル走、体育館での体操競技を見てきました。

今回の二〇二一年東京オリンピックは、どうなるのか？ ともかくこの一年、集会を含め行事は、ほとんど中止。私の関連すること、泉じよんがら踊りがあります。桜の花の時期に伏見川即席舞台で、じよんがら踊りを披露するのですが、今年はありません。同じく七月、十一月の夏まつり、三馬文化祭も中止となり、泉じよんがらを唄うこともなかった。民謡の練習もなしで声も出してない。

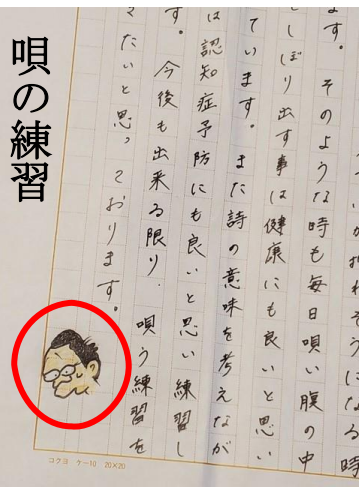
私ども、やすらぎの仲間がときどき飲みに行った片町の店。ママさんが、客が少なくなり、コロナ感染を早くに察してか、二月に店を閉じた。寂しいこと。。

コロナ、コロナで振り回された一年でした。二〇二一年は、太陽の皆既日食の輪で光る、本来のコロナのように、明るい年であってほしいものです。



Syouji Maekawa





はばたき支部長 上田昭夫

私は毎朝、唄の練習を三十分位しています。大きく口を開け、大きな声で音を外さないように、また詩の情景を思い描きながら唄うことを心がけています。このように練習を積み重ねていくことで「力」がつくといい、日々練習を怠らないように張っています。

しかし、すぐに声が枯れてしまったり音が折れそうになる時もあります。そのような時も毎日唄い、腹の中から声を絞り出すことは健康にも良いと思ひ頑張っています。

また、詩の意味を考えながら唄うことは認知症予防にも良いと思ひ練習に励んでいます。

「一日、唄の練習を休むと三日遅れる」の言葉を胸に今後も出来る限り唄う練習を続けていきたいと思っています。

## 虹に

中央支部長 小崎妃登美

今年（令和二年）は、コロナ禍で自分の事（民謡会の行事）は二月から止まったままです。その分、子供達と向き合う時間になりました。

長女は専門学校で新しい友達もできて、とても楽しそうですが、課題提出や検定試験などに追われ、十二月には合宿で自動車学校に行く予定です。私も民謡が唄えなくなつて不安になり、高校受験生ですが二女の気分転換も兼ねていつもよりカラオケに行きました。高校生になつたら、たぶん一緒に行つてくれないと思いません。

長男は六年生で学校とかの行事が、ほぼ無くなり私としても残念な思いです。ただ、スポーツ少年団サッカーのリーグ戦が六月から出来たので、外で走る子供を応援する事が出来ました。

来年は自分のことですが、子供達それぞれ学校生活を無事に送れますように、願いを込めて：虹に！



# とどけ 虹に！！



中央支部長 小崎妃登美

# 一年を振り返って

キッズ支部 西房



四月からコロナウィルスの影響で、子ども達が幼稚園に登園できず四、五月は一日ずつ在宅ワークがありました。また土、日曜日でも家で過ごすことが多く、私は物作り、亜美は料理や裁縫で楽しく過ごしていました。

家呑みも、もちろん増え家居酒屋が開店していました。(笑)

六月を過ぎると子ども達も登園し、今年も乳児担当になり、子ども達の顔に癒されながらも仕事に追われ、なんとか働いていました。

相変わらず土、日曜日はコロナの影響で民謡の活動も出来ないなか、友達や同期と会う機会が増えてストレス解消になりました。

幼稚園の盆踊りでは「いいね金沢」を唄うことになり、久しぶりだったので声が続くか心配でしたが、なんとかギリギリセーフでした!!

秋を過ぎると数回着物を着ることがあり、やっぱり楽しいなあと思えました。早くみんなでワイワイしたいなあと思います。

(松田隆行さんYoutubeの沢内甚句にハマりました。)



# 故 荒木美智子先輩との思い出

いな穂支部長 中谷すみ子

令和二年十月十日に荒木美智子さん九十二歳で亡くなられ、約二ヶ月が過ぎました。林中民謡教室が昭和四十八年に発足以来、初代 杉山貞夫先生と共に約四十年間近く私達、林中の会員を導いて下さいました。自分に厳しく、いつも凛とした態度で接して下さいました。

民謡の入会の目的は、将来大きな舞台に立つ事。見事、有言実行され努力が実ったのでした。

忘れられない思い出の一つに「越中おわら節」を、ずっと挑戦し続け、日本民謡協会の大会で東京行きを手にしたことで私達も東京へ応援に行けた事です。

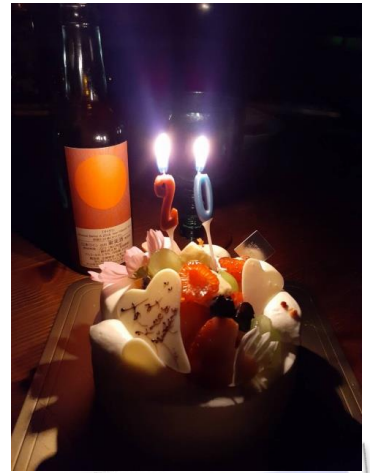
現在、私達は新型コロナウイルス感染予防の為に唄の練習は自粛していますが、対策を相談して少しでも練習出来る方向にしなければと思っています。







ゆい  
の



元気拡大



この指  
と一まれ

# 雑感

故 中村三朗

平成二十四年十一月四日(日)私ども富奥公民館の民謡サークル、そして押野公民館の民謡サークルが合同で野々市民謡協会として文化会館フォルテの舞台に立つ機会を得ました。

これは、各地区にある四つの公民館(本町・郷・富奥・押野)の、いろいろなサークルの活動発表の一つの場として行われるものです。

当日のトップは、本町公民館の謡曲の出演があり、われわれ民謡協会の出演はその次でした。先の方々が終了しても舞台に山台やマイクの準備が必要で、その間、総合司会の結川弥生さんと私がトークを行って時間潰しを行うことになった。やり取りの中で結川さんより「中村さんにとって民謡を続けてこられた魅力・理由は何ですか?」と問われ「ウーン」と答えに詰まり答えにならない答えをしてしまった。

全てが終わってから、その事について考えてみたが結論的なものは何も出てこない。唄が好きだから?否、それならもつと上手くなってる筈。

こんな事、人に聞いても分かる訳ないし等々何日間か考えてみた。

最終的に無理やり「一緒に居る人に恵まれたから」を結論とした。

しかしその後、その事をぶりかえして考えてみると、四十余年間民謡を続けられたのは、師匠はじめ良い先輩・仲間が居たからで、これがそうでなかったら当然の事ながら、とうの昔に・・となっていたと思う。

若い時分には、いま自分が先輩・仲間達より受けている恩義を「親しんぐり 子しんぐり」と言う言葉で教えられ、また世間のルール・しきたり等、親が教えにくい事も含め、そんな「一緒に居る人」の中で育まれたように思う。

従って「一緒に居る人に恵まれたから」は絶対に間違いではない事に気が付いた出来事だった。

平成二十五年一月号 「ふれあい」記事より

民謡を続けられたのは、

一緒に居る人に恵まれたから







※撮影時のみマスクを外して頂きました。

## ■編集後記

〈広報担当〉

「ふれあい」が、お陰さまで三十周年を迎えました。ふれあい第一号は、「みんなの広場」として会報がほしいという声から平成二年四月B4サイズ一枚でスタートをきり、年二回発行されました。翌年からはA4サイズとなり平成十三年から年一回の発行となりました。平成十五年に冊子化され、写真もカラーへと変わりワープロからパソコン、インターネットへと「ふれあい」も大きく様変わりしました。三十年の時の流れを感じます。

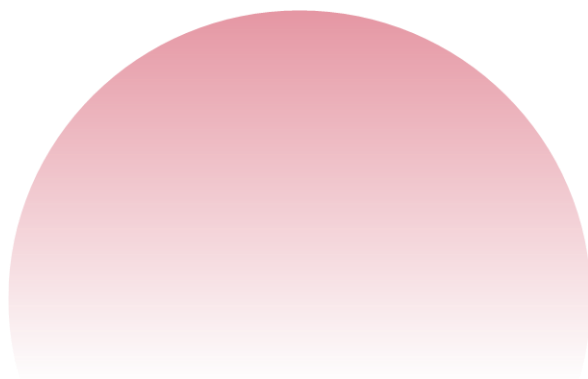
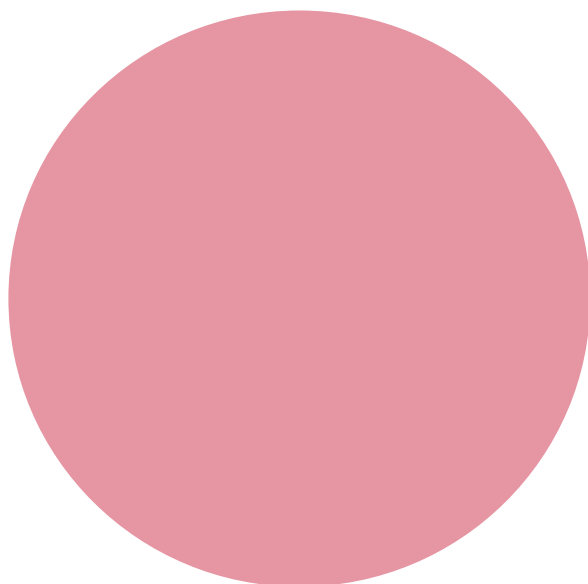
ここで、ふれあいを創刊された先輩たちに敬意を表し、改めて皆さんのご協力に感謝いたします。

昨年、中村三朗さんと荒木美智子さんのお二人が亡くなられました。不慮の事故に遭われた三朗さん・・・三朗さんを偲んで過去の「ふれあい」文章から一例を掲載させていただきました。愚直で誠実な人柄がそのまま文章に記されています。

そして、荒木さんの、目標に向かってひたむきに練習する姿勢。厳しさと優しさを学びました。私たちは、お二人を忘れません。ありがとうございます。

コロナ禍の中、唄う事が出来ない、練習ができないもどかしさ。ストレスがたまる不自由な生活を強いられた仲間と顔を合わせ唄う事が、いかに心を満たしていたかを実感しました。

コロナの猛威は、まだまだ続きそうな気配。昔から先人達は、民謡の底力で苦難を乗り越えて来た筈。二〇二一年 出来ることを準備しましょう。



杉山民謡会ホームページ <http://ma-ma-ma.sakura.ne.jp/>



令和 三年 一月